



大城精徳《ナンバンギセル咲く》 1977年、77.0×125.0cm、キャンバス・油彩



大城精徳スケッチブックより (制作年月日不明)

ちぎれたアザミの花にみる、大城精徳のシュルレアリスムの表現

右の図版は「1964・3・28 久米島」とサインされた、大城精徳のスケッチである。この31年後に《アザミの咲く風景》を描くが、比較すると、画面右の茎が消え浮いているような花まで、正確に《アザミの咲く風景》へ転写されている。筆者は最初に《アザミの咲く風景》だけを見て、仕上がる前に筆をおいたかと想像していた。しかし、右のスケッチが発見されたことで、大城は明らかに茎を消した、アザミの花を描いていることがわかった。

このスケッチは、2018年に大城精徳のご遺族から沖縄県立博物館・美術館へ寄せられた資料の一部である。大城は、第二次世界大戦で農林鉄血勤皇隊を経て、沖縄に駐留する米軍の通訳になるなど、時代の変化に逆らわず生きたアーティストである。その大城が、晩年に差し掛かり、このようなシュルレアリスムの画風へと変化していったことが、興味深い。

シュルレアリスムは、第一次世界大戦後のヨーロッパを中心に流行した、非現実的な空想世界を描く表現様式である。《アザミの咲く風景》は、ホームセンターなどで入手可能な有孔ボードに、幻想的なアザミの花が描かれている。戦後沖縄の絵画には、直接的な戦争トラウマに関する表現が少ない。この作品が、戦争の体験や記憶によることで生まれた表現であるならば、沖縄のシュルレアリスム絵画の中には、隠された心傷が息づいているのだろうか。

アザミの花言葉は「independence (独立)」、「nobility of character (人格の高潔さ)」、「austerity (厳格)」、「misanthropy (人間嫌い)」などで、奄美諸島・沖縄諸島・先島諸島の海岸で見られる。琉球列島の固有種では、イリオモテアザミなどがあり、花の最盛期は3月頃である。



大城精徳スケッチブックより（於久米島）



上記スケッチより部分。色の指定が書かれている。



大城精徳《アザミの咲く風景》
1995年、27.0×24.4cm 有孔ボード・油彩



《アザミの咲く風景》
ちぎれた花部分